特集にあたって

枇々木　規雄（慶応義塾大学）

第4回の企業事例交流会が昨年の9月21日に秋季研究発表会のセッションの一部として『金融・証券ビジネスとOR』という統一テーマで成蹊大学にて開催されました。

「金融で事例ですか？　ちょっと難しい。」最初にオーガナイザを依頼されたときの一言．特に金融機関の所属者が学会等で事例を発表する場合，事例として期待している内容を聞くのは難しい（発表したがらない）と感じていたからである．しかし，講演者の多大な努力のおかげで，非常に分かりやすく事例を発表していただきました．本特集号はその講演の中から5人の方に執筆をお願いしました．

白川正樹氏（興銀第一フィナンシャルテクノロジー）の「金利派生商品の時価評価と評価システム」では，2000年4月開始のデリバティブ時価会計に必要な時価評価ロジックの構築とその実装システムについて解説してもらいました．デリバティブによって巨大損失を被る背景には時価会計でなかったこともその一因であると感じています．デリバティブの正しい理解のためにも時価会計導入と評価方法は必須になると思います．鳥居秀行氏（ニューメリカルテクノロジーズ）の「金融に変革をもたらす大規模シミュレーション」では，金融業に用いられるモンテカルロ・シミュレーションの技術的発展について解説してもらいました．鳥居氏は信用リスク管理の大規模シミュレーションシステムの開発者でもあり，その重要性が実感としてヒシヒシと伝わってきます．和合谷與志雄氏の「リスクマネジメント高度化の基礎となる金利システムの開発」では，銀行のバンキング勘定における資金収益管理システムで用いる金利システムについて解説してもらいました．金利システムはリスク計量化のためのシミュレーションにおいて重要な役割を果たすものであり，実務的な視点で具体的で分かりやすく，モデルや分析結果を説明してくれています．青沼君明氏（東京三菱銀行）の「クレジット・リスクとクレジット・デフォルト・スワップの評価モデル」は，クレジットリスク計量化のためのモデル化の概要とクレジットデフォルトスワップの評価モデルを解説してもらいました．クレジットデリバティブ商品の価格評価を含むクレジットリスクの計量化は，BIS第3次規制の対象でもあり，現在金融業界をにぎわしている話題でもあります．小野潔氏（ニッセイ基礎研究所）の「金融業におけるデータマイニングの応用」は，金融業のマーケティングとリスク管理のために用いられているデータマイニングについて簡潔に，網羅的に解説してもらいました．実際にマイニングツールを用いた生保の保険解約の防止分析は，データマイニングが金融ビジネスへの工学的なアプローチとして今後もますます重要な手法になると感じました．

ところで，日本OR学会における金融分野を支える（特に若手）研究者の少なさは危機的（？）状況にあります．金融に関する本誌の特集は過去5回ありましたが，そのうち4回は1987年～1991年の間で，もう1回は1996年．他の学会が創設されたこともあり，時間とともにOR学会の中で金融工学の研究者が増えなくなってしまいました．でも，金融分野にはORワーカーの活躍できる「事例」が数多く存在しています．このことは今回の執筆者をはじめ，多くの人が感じていると思います．ORワーカーの対象範囲を広げるためにも，金融業に対する工学的アプローチを，（1）金融数理工学（数理ファイナンス工学），（2）金融マーケティング工学，（3）電子金融工学，の3つの分野に広げ，これらをまとめて金融ビジネス工学と呼び，体系立てていくことを提唱したいと考えています．これは全く個人的な意見であり，初めて書くことなので，是非皆さんの意見をお聞きしたいと思います．今回の特集号を読んで，ORワーカーの中から金融を専門に研究してくれる（特に若い）人材が増えることを望んでいます．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．